
サンタクロースのプレゼント

森野カエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタクロースのプレゼント

【Nコード】

N2280Z

【作者名】

森野カエル

【あらすじ】

プレゼントはいらない。
少女は俺にそう言ってきた。
自サイトより

第十三条、三項、その二。

一定の年齢を越えた者には、決められた衣服を着ている限り、見える事はない。

この仕事に就くときに、必ず一度は目を通す契約事項の一つに、そう書いてあった。

だから、安心してこの家に入ったのだ。

もちろん、確認は怠らなかった。

リストには、一定の年齢以下の者はいなかったはずだ。

なのに自分は今、この家の娘に縛り上げられ捕らわれている。

きらきらさせた大きな目が、自分を見つめていた。

年齢は十歳。

名前は……。

「えーと、明里ちゃん？だったかな？」

「すごい。サンタさんって名前までわかるんだ」

サンタ？

サンタってのは確か、下界の人間達の間で信じられている、無料でプレゼントを配るお爺さんの事だったか？

でも、かなり幼い子どもしか、信じていないって聞いているが。

「でも、髭がないね」

女の子が俺の顎を撫でてくる。

あるわけがない。

俺はまだ、二十一歳だ。

「服はちゃんと赤と白だ」

服は制服で、赤と白のツートンカラーだ。

これさえ着ていれば、決して見えないはずだった。

しかし、この女の子には俺が見えている。

どういうことなのか。

「あのねサンタさん。私は今年のプレゼントいらない」

そういえば、まだ女の子の誤解を解いていなかった。

「悪いけど、俺はサンタじゃないよ」

「え？違うの？」

「ああ」

正確に言えば、実は間違いではない。

人間の間で信じられているサンタクロースは、俺達がモデルになっている。

子どもが仕事中の我々の姿を見て噂となり、サンタクロースが作られたのだ。

ずいぶんと昔の事だが、そのおかげで仕事がしやすくなったと、当時は現役の所長が言っていた。

「じゃあ、あなたは誰？」

「え？」

「もしかして泥棒……」

女の子はさっと俺から離れる。

「警察に……」

部屋から出ていこうとする女の子に、俺は焦った。

「ち、ちょっと待て！違う！俺は泥棒じゃない！」

「じゃあ何？」

女の子の手は、ドアノブにかけられたままだ。

「えーと、ほら。あれだ。あの、えっと、その」

気が焦るばかりで何も思い付かない。

女の子がドアノブを回し、出ていこうとする。

「わーっ！待っ」

「ちょっと、ご主人！まだっすか！」

俺の声に誰かの声がかぶさる。

女の子の声じゃない。

新しく聞こえた声に、女の子が立ち止まった。

「誰？」

声の聞こえた方を見ると、窓から角の生えた動物が顔を出していた。女の子がびしりと固まる。そりゃそうだ。窓はきちんと閉まっている。

その動物は、窓ガラスを通り抜け、にゅっと顔だけが出ていたのだ。そういえば大きな家に入った時に、あんな感じの壁掛けを見たな。確か剥製とかいうんだっただけかな？

「ご主人？これはいつたい・・・」

俺をご主人と呼ぶこの動物は、仕事でのパートナーだ。俺の仕事のサポートをしている。

「きゃーっ、トナカイだ！」

ドアを離れ、女の子が動物の首に飛び付く。

「なんだ！やっぱりサンタさんなんじゃない！」

部屋の中へ動物をぐいぐいと女の子は引っ張り込む。動物は窓をすり抜け、鹿のような身体が現れた。

「ソリは付いていないんだ」

女の子は動物の身体をベタベタと触り、撫で回す。興味津々といった感じだ。

「ああー。ばれちゃったか」

俺は大袈裟に残念がってみせた。ここはもうこれで通すしかない。

「そうなんだ。サンタなんだよ」

警察に通報されるよりかました。

この女の子に俺が見えるという事は、警察にも見えるかもしれない。

「どうしよう。ばれると困るんだけどな」

しょんぼりと頂垂れてみる。

すると女の子は動物から離れ、俺に寄ってきた。

「俺はサンタを辞める事になる」

「言わない！誰にも言わないよ！」

女の子は俺の顔を覗き込もうとしてきた。

俺はわざと顔を背け、さらに声に悲壮感を込めてみる。

「本当に黙っててくれるの？」

「うん、絶対黙ってる」

ちらりと女の子を見ると、女の子は何度も首を縦に振っていた。

「ありがとう。助かるよ」

これで一安心だ。

「ついでに、この紐もほどいてもらえないかな？」

「うん、ほどく」

女の子は、俺の後ろに回り込み、紐をほどき始めた。
「よし！」

うまくいった！

身体の自由がきけば、ガッツポーズを決めている所だ。

「でね、サンタさん」

「ん？何だ？」

「私ね。今年のプレゼントはいらないの」

そういえば、さっきもそんなことを言っていた。

プレゼントがいらないなんて今時珍しい子どもだ。

「あと、来年もいらない。」

「え？」

「その後もずっと、ずーっといらない」

紐をほどく女の子の手が止まる。

「だから、こっちの願いを叶えてほしいの」

女の子は、白い封筒を出してきた。

「サンタさんへのお願いは、お手紙に書くんだよね？だから、ここに書いたから」

封筒をずいっと突き出される。

「はい」

女の子の目は、真剣だった。

「・・・受け取りたいんだけど、縛られてて受け取れないんだよね」

「あ、そっか」

女の子は、またほどこきに入る。

何だか女の子を騙しているようで、心がずきずきしてきた。
でも、仕方がないのだ。

「はい、ほどこけたよ」

その言葉を聞いて、俺は素早く立ち上がる。

「サンタさん？」

女の子は、俺の急な動きに戸惑っていた。

その隙に、俺は動物に駆け寄り首輪を掴み、窓を目指した。

「外に出るぞ！」

俺の声を聞き、動物も急いで窓に向かう。

「待って、サンタさん！」

女の子の止める声が後ろから聞こえるが、俺は止まらない。
来た時と同じように窓をすり抜け、外に出る。
外はベランダも無く、ここは二階だ。
すぐに動物の背に乗り、空へ飛び立つ。
窓から見えないように、屋根の上に降り立った。

「サンタさん！サンタさんどこ？！待って！」

窓が開く音がして、女の子の声が続く。

しばらく屋根の上でその声を聞いていたが、諦めたのか女の子の声は聞こえなくなった。

窓の閉まる音も聞こえてくる。

「ご主人・・・」

動物が控え目に、俺に話しかけてきた。

返事をしない俺に、もう一度動物が呼んでくる。

「ご主人・・・？」

「うるさい。わかってる。可哀想だって言っただろ？」

でも、自分はサンタじゃない。

お願いなんて、叶えられるはずがないじゃないか。

「いや、違っつすよ。ご主人の背中に、何か白い物が付いてます」

「・・・・・・・・」

勘違いに少し顔を赤くしながら背中に手を回し、背中に付いている

何かを取る。

「これは・・・」

それは、白い封筒だった。

「いつの間に」

封筒を開け、中の便箋を取り出す。

「いいんすか？勝手に開けちゃって」

「これは俺宛だ」

ここまでして叶えたい願いに、俺は興味が出てきた。便箋を広げ、書かれている内容を読み上げる。

「サンタさんへ。私は今年のプレゼントはいりません。これからのプレゼントもいりません。プレゼントはいらないので、私のお願いを叶えて下さい。私のお願いは、お母さんの・・・」

そこで、読み上げる声が止まった。

「ご主人？続きはどうしたんすか？」

動物にくくり付けておいた袋から、俺は一冊のファイルを取り出した。

ページをめくり、この家に関する項目を見る。

「ご主人？」

「行く所が出来た」

ファイルと手紙を袋にしまい、動物の背に乗る。

「どこっすか？」

「病院だ」

俺は現在、所長室に呼び出されていた。

所長の顔は今にも茹で上がりそうな程赤くなっている。別に暑いからではない。

「何をやっとなるんだっつっ！！！」

さっきまでは声を抑えて回りくどく話していたが、ついに限界がきたようだ。

机をバンツと叩き、所長は立ち上がる。

所長室の中を所長の声が響きわたった。

「担当地区の補充タンクを空にするなど、前代未聞だぞっ！！」

俺は所長の怒鳴り声を、甘んじて受け入れる。

「お前は、下界の人間達に、運を配るといふ仕事を、何だと思ってるんだ！」

こうなる事はわかっていた。
わかっててやったのだ。

「こんなことは、こんなことはっ、っっっ!」

机の上の水を慌てて所長は飲む。
とっとう、限界を越えたようだ。

「はあ、はあ。とにかく、お前には、罰を与える」

どさりとイスに座り呼吸を整えながら、所長はやっと俺が待っていた言葉を言った。

「減俸と担当地区のタンクが規定量に戻るまで、工場での無報酬労働を命ずる」

「はい、わかりました」
俺はすぐに答える。

「これは、すでに決定事項で、拒否する事は……。って、え？」

「今日からですか？明日からですか？」

「明日からだが・・・」

どうやら、所長は俺がごねると思っていたらしい。
肩透かしをくらったからか、間の抜けた顔をしている。

「何か？」

「いや、わかっているならいい」

ゴホンと一つ咳をして、所長は顔を整える。

「他に何かありますか？」

「特にはないが・・・」

「そうですね。それでは失礼させて頂きたいのですが」

俺はさっさと帰りたかった。

動揺している今が抜けるチャンスだ。

「いや、しかし」

「もう何もありませんよね？」

「あ、ああ」

「なら、良いですよね？」

「ああ、いや」

「まだ何か？」

「いや、ない。わかった。退室を許可する」

俺は頭を下げ、素早く所長室を出ていった。

呼び止められ所長室に逆戻りするの嫌だったので、そのまま建物も出る。

すると、入口でパートナーの動物が待っていた。

「ご主人、どうでした？」

心配そうな顔で訪ねられる。

「少しの間、貧乏暮らしを我慢するだけですんだよ」

階段を降りようと、右足を出す。

が、左足に引っかけ、階段を転げ落ちた。

「ご、ご主人?!大丈夫ですか？」

俺は、痛みに堪えながら立ち上がる。

「今日は、朝からどうしたんすか?歩けばこけるし、やたら頭はぶつけるし」

この動物の言う通り、今日は朝からついていない。

「物が上から降ってくれば、全て当たるし。・・・って、まさか、ご主人?!」

服に付いた砂を、俺は叩いて落とす。

「仕方ないだろう。タンクの運だけじゃ少し足りなかったんだ。人が一生を終える迄の運って、以外と多かったんだな」

俺はしみじみと思う。

「だからって、自分の運を分けてしまっなんて・・・」

動物は急に俯き、身体が震えだす。

次に顔を上げた時、その顔は涙で濡れていた。

「ご主人〜！一生ついて行くっす〜！」

動物は顔をぐりぐりと俺に擦り付けてきた。

「や、やめる」

その言葉は嬉しいが、泣いている顔を擦り付けられるのは嬉しくない。

「ご主人のパートナーになった時は、こんな頼りなさそうな奴に付いて大丈夫なのか？、って思ってたんすが、もうそんなの関係ないっす」

この動物はそんな事を考えていたのか。
俺は少しむかついたが堪える。

「自分はご主人が誇らしいっす！」

動物はさらに顔を強く擦り付けてくる。

「わかった。わかったから。ほら、行くぞ」

無理やり動物の顔を引き剥がし、俺は先に歩き始める。

「あ！ご主人！待ってっす」

その後を慌てて動物が追ってくる。

明日からはしばらく辛い毎日が続くだろう。

しかし、俺の気持ちはすつきりと晴れ渡っていた。

自然に浮かぶ笑みを動物に見られないように、俺は空を見上げた。

そこには、雲一つない空が広がっていた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2280z/>

サンタクロースのプレゼント

2011年12月8日03時08分発行